

「視野が広がり、自分に気づく緩和ケア」

先日、このコラムを読んでくれている同業者から、「最近、書いてある話がムズカシイ」とご意見をいただきました。べつにいいじゃないですか 笑。

さて今回はちょうど 2024 年のお正月なので、大きめの話ということにして、
” 我々が提供する価値とはなにか？ ” について書こうと思います。

こんなのはどうでしょう？

「視野が広がり、自分に気づく緩和ケア」

今のところ私ひとりだけの隠れテーマです。

答えを教えてあげるのではなく、一緒に考えて、何が困りごとなのかに気づくためのもの。それが私のイメージする緩和ケアです。人間は一人ひとり全部違うから、最初から全員向けの正解なんか用意できません。

病気が発覚した患者さんやその家族というのは、それぞれの人生における初めての、最もネガティブな体験に対して、今自分がどうふるまっていかわからない人たちばかりです。私たち医療者は、その「初めて性」に対してあまりにも無頓着だと思います。初めてなのに、次々押し寄せる選択の波に毎回失敗できないと思って追いつめられている人たち。特にがんであれば初めから「もう駄目だ」としか思い浮かばない人も多い。でもたいていは、どんなに進んだ病状であっても明日すぐ死にはしない。望むかどうかは別にしてその日までの人生は何らかの形で続くんです。初めての脅威に対して一気に視野が狭くなったまま、焦って決めてしまう。

普段よくする話ですが、未来が仮に決まっていたとしても、人間には予知能力は備わっていません。推定で予測を試みるだけです。ハズレていることも多くて、その分岐の先は無限に分かれています。追い詰められた場面でも、慌てなければ、生きる理由とか、自分の中での気づきは必ずあると思います。言い換えると、自分はべつに間違っていない / 間違っていなかった、と思って過ごして欲しいのです。これからだって「案外捨てたもんじゃない」のですから。

未来がわからないという前提で、自分がどちら方面に行きたいかというイメージを多くの人と共有することで、分かれ道ごとの選択に豊かさが加わるはず。それが私たちの、あるいは当事者ではない他人が提供できるしごとの価値ではないかと私は思っています。だからたまたま出会った私たちに、何か語ってみてください。聴きますから。

年明けから難しすぎたかな。

本年も私共緩和ケアチームならびに緩和ケア病棟をよろしくお願いいたします。